



5 武庫大橋左岸橋詰より



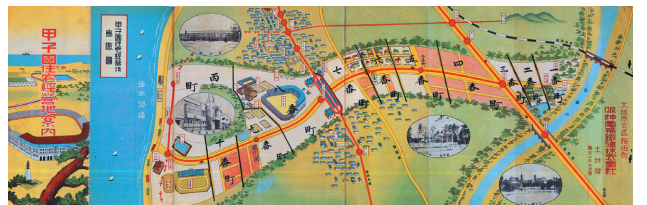
6 武庫大橋位置図

ているとされたため、緑豊かな庭をもつ静な住環境が形成されることとなった。また帝国ホテル元支配人の林愛作を擁して、リゾートホテルが計画された。林は、新築の武庫大橋橋詰の松林あたりを敷地に選び、帝国ホテル新館を設計したF・L・ライトの弟子である遠藤新を起用した。一九三〇(昭和五年)年に瀟洒なデザインの「甲子園ホテル」(現在武庫川女子大学)が開業すると、大阪の迎賓館として利用され、また阪神間に移住してきた中産階級の社交の場ともなっていた。

さて、武庫大橋建設事業の監修を務めたのは、アメリカでの修行から戻ったばかりの増田淳である。増田は、風景に調和させつつ洗練された力強い構造体を表現する力量で後に世に知られる、近代屈指の技術者であった。西宮工営所長の溝口親種が、竣工直後に「此の地方将来の発展亦予期すべきを以て、本橋は市街橋に適する強度と、四周の風致に応はしき意匠とを与へて計画せり」と述べているように、隣接する甲子園経営地周辺に形成され始めた文化の雰囲気、増田は感じ取

っていたに違いない。橋の主要構造である開腹アーチ自体が、モダンな雰囲気シルエットをもっているだけでなく、高欄や歩道のバルコニーなど、細部がていねいにデザインされており、新しい生活文化を支える地域の橋として十分な役割を果たしたであろう。

現在でも、武庫大橋を渡れば、六甲山脈を背景にした照明塔の並びが美しく、河川敷を歩けば、見上げるアーチとバルコニーが心地よい。河畔の松林から旧甲子園ホテルの二本の塔が顔を見せている。橋上ですれ違う人びとの表情が、どこか楽しげに見えたのは気のせいだろうか。

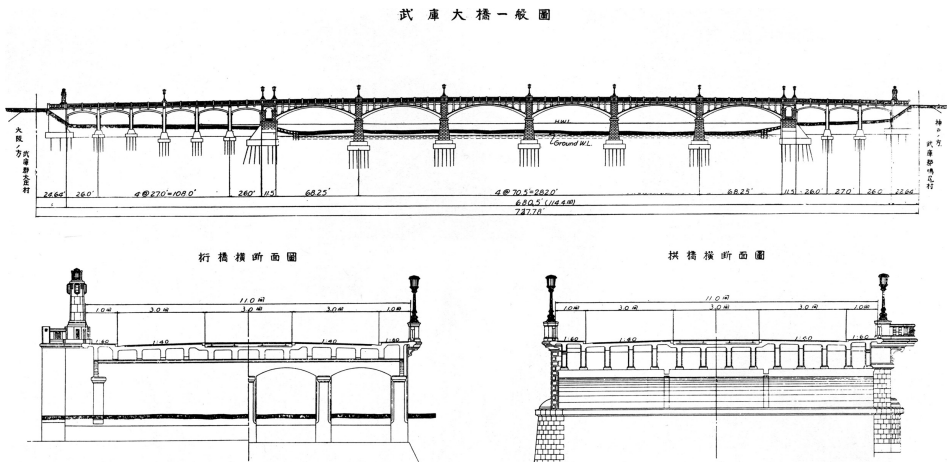


4 昭和5年の甲子園住宅経営地案内 左に武庫大橋が描かれている(『阪神間モダニズム』から転載)²⁾

参考文献

- 1) 角野幸博：甲子園/西宮 大衆化する健康・娯楽地のイメージ、近代日本の郊外住宅地、鹿島出版会、2000
- 2) 「阪神間モダニズム」展実行委員会：阪神間モダニズム—六甲山麓に花開いた文化/明治末期—昭和15年の軌跡、淡交社、1997
- 3) 野田誠三ら：甲子園の三十年、輸送奉仕の五十年、阪神電気鉄道(株)、1955
- 4) 中井祐：土木エンジニアたちの群像/プロフェッショナルの表現、建設業界、9月号、2001
- 5) 溝口親種：武庫大橋の工事に就て、土木建築工事画報、第3巻第4号、1927

薫る阪神間モダニズム — 武庫大橋 —



1 武庫大橋設計図面(土木建築工事画報、第3巻、第4号、p.10の図より)



3 武庫大橋高欄のデザイン



2 旧甲子園ホテル

国道二号線が、尼崎市と西宮市の境界である武庫川を渡るところにあるのが、武庫大橋である。阪神間を横に貫き人と物資を輸送する大動脈として建設された国道二号線の一部として、一九二六(大正十五年)年に竣工した。関西圏の産業を支えてきた骨太のインフラである一方で、この橋は地域の文化を支える人間的で柔らかな顔をもっている。

明治後期、紡績業などの産業を発達させた大阪と、近代港による国際貿易都市となった神戸において、集中する労働力が都市人口の急速な増加を招き、都市環境のさまざまな問題を引き起こし始めていた。この胎動のなかで阪神電鉄は、一九〇五(明治三十八)年に小冊子『市外居住のすすめ』を発行し、郊外生活がいかに健康に適しているかを強調した。これを嚆矢として、関西系財閥や豪商をはじめ、中産階級の人びとの間で、郊外住宅地を創造して新たな住環境を得ることが積極的に求められ、そのライフスタイルに一つの文化的流れが生まれた。これを一般に「阪神間モダニズム」という。

この時代ただ中であって建設された武庫大橋は、周辺地域の文脈のなかで、重要な位置づけをもつこととなる。まず一九二一(大正十)年頃に兵庫県は、氾濫川であった武庫川を改修するために、この川から分岐する枝川と申川を廃川として払い下げることで資金を得ることを決定する。細長いこの敷地をまとめて買い受けたのが、住宅経営およびレクリエーション施設を建設する構想を抱いていた阪神電鉄であった。

手に入れた敷地において、阪神電鉄がまず取り組んだのが、球場の建設であった。一九二四(大正十三)年に竣工した巨大スタジアムは、その年の干支にちなんで「甲子園球場」と名付けられた。球場建設は、『市外居住のすすめ』に謳われた、健康・健全な郊外生活を求める衛生志向の文脈によるものであり、甲子園の名を冠した一連の住宅地経営がこれに続いた。特に武庫大橋の位置に近いうえ甲子園の地域は、廃川沿の松が残っており、建売をするよりは、高級豪華住宅地の建設を見込んだ大きな敷地で売る土地経営に適し

出村嘉史 DEMURA Yoshimichi
正会員 工博
京都大学大学院 工学研究科

